

川端君の「ウェブ社会論」を読んで

藤井 聡

川端君は、「塾生通信」第二号のこの原稿の中で、ネット社会を巡る最近のいくつかの言説を引用しながら、次のように結論づけている。“いつまで経っても「不安」と「リアリティ」の間で揺れ動く「人間」として生き続けているであろう、未来の我々と我々の子孫のために我々がなすべきことは、あくまで「人間」を前提とした技術と思想を組み立てておくことである。” 筆者は、この結論に強く同意するものである。その上で、この結論を改めて解釈することを通じて、この問題についてさらに考えを進めてみることにしたい。

まず、この川端君のこの結論は、我々と我々の子孫とは一体いかなる存在であるのかという認識論的側面と、その認識論を踏まえた上でいかなる実践を、いま、ここで為すべきかという実践論的側面の双方を併せ持っていると解釈することもできる。そしてその認識論的側面においては、不安に陥ることでリアリティを求める一方、リアリティを信ずることによってさらに不安に陥るといふ本質的矛盾を乗り越える力を持つという一点こそが人間の人間たる所以である、という認識が表明されている。これを、例えばキルケゴールが言うところの「精神」という言葉を援用しつつ換言するならば、そうしたリアリティに対する不安と安心という相反する矛盾した両者の間の弁証法的関係を全面的に引き受けた上でその止揚（アウフヘーベン）を成し遂げる力こそが「精神」と呼ばれるものであり、その精神を持つという一点をもってして人間がはじめて人間になり得るのだということを主張するものだと行うことができるであろう。

その一方で、上記結論の実践論的側面は、そうした人間を前提とした技術と思想を組み立てることを、我々がいま、ここで「為すべきなのだ」と主張するところにある。この実践論的主張は、逆に言うならば、「人間」を前提としない思想や技術は、それを援用すればするほどに我々から弁証法的諸関係の止揚をもたらす「精神性」の疎外をもたらすのであり、それ故に、そのような思想や技術の構築に加担することは戒められなければならない、という含みを一面において持っている。言うまでもなく、川端君がここで引用している近年のウェブを巡る技術論や社会論が、この意味に於いて戒められるべき対象であることは論をまたない。ただし、この主張において戒められているのは、その一点だけではない。そこでは、「人間が人間たり得るのはリアリティを巡る不安と安心の弁証法的関係を乗り越える力を持つ精神性を持つ場合に限られているのだ」ということを理解しながら、「人間」を前提とした技術と思想を組み立てないという態度もまた、暗に戒められている点を見逃してはならない。この第二の戒めは、認識を深めた人間にのみ妥当する戒めである、という点に着目するのなら、それは、認識を深めた人間にのみ背負わされるところの新たな

十字架なのだと言うこともできるであろう。

とは言え、そうした実践性が不在であるところの理解は真の認識とは言えず、また逆に、認識の徹底が不在のままにされる実践は「真の人間の行い」とも呼べない代物にしか過ぎないこともまた事実である。実践を伴わない認識は認識の深みという尺度において浅いものにしか過ぎず、認識を伴わない実践は実践の真剣さという尺度において生ぬるいものにしか過ぎない。すなわちここでも、認識と実践という相反する両者の弁証法的関係が存在しているのである。

ここでさらに、川端君の結論において、我々が組み立てねばならぬものとして論じられているのは「技術と思想」であった、という点に着目してみよう。これもまた、前者がリアリティや実践に、後者が不安や認識に対応するものであり、その弁証法的関係はそれぞれ相似形をなしている。したがって、上述の様な「真の人間」の視座に近づけば近づくほどに、普段は異なるものと見られがちな技術と思想の間の境界は、徐々に消滅していくこととなるのである。そうである以上、「ウェブ」という何某か新規なものが我々の社会の中に、あるいはその歴史的連続体である伝統の中に、調和ある健全なる形で取り込まれていくこととなるのは、我々がそうした視座に立つことができるのか出来ないのか、という一点にかかっているとすることができるのである。

ところで、筆者は土木工学という技術に携わる職業に就いており、そうした職業の人間はしばしば「土木技術者」と呼ばれている。しかし、その一方で、あまり活字等では目にしない言葉であるが、普段の会話の中では「土木屋」という言葉が使われることが多い。筆者はどちらかという土木技術者という言葉よりこの土木屋という言葉に対してより愛着を持っているのだが、筆者と同じく、その様に感じている同業の方達も多い。言葉の定義から考えるなら、土木技術者とは土木の技術に関わる者であり、土木屋とは土木に関わる仕事をしている者ということである。この点を踏まえるなら、おそらくは、土木屋という言葉を用いている方達が多いのは、技術と思想の間の境界が存在することに対するある種の直感的な危険を感じているためである、とも言えるのではないかと思う。ただしその一方で、土木技術者という言葉に誇りを感じている土木技術者達も多い。実を言うと、その気持ちも分からないでもない。なぜなら、単なる物理現象のみについての技術を語るものは真の技術ではない、真の技術とは思想性も帯びたものなのだ、と少なくとも彼らの一部が暗に感じているようにも思えるからである。

いずれにしても、その呼び名はどうであれ、ウェブを一例とする新しい「技術」に対して、どのように対峙していくのかという問題は「真の人間」たろうとする者にとって重要

な仕事であることは間違いない。それは、いわゆる「近代」に伴う諸問題や、どこにでもその身を潜めている「ニヒリズム」の脅威が、先鋭化され、具現化する重要な局面の一つに他ならないからである。今回の川端君の原稿を通じて、改めてその意を強くした次第である。

平成 19 年 7 月 21 日発行・第 22 号掲載 藤井 聡 (東京工業大学教授)

筆者の研究室 <http://www.plan.cv.titech.ac.jp/fujiilab/index.html>